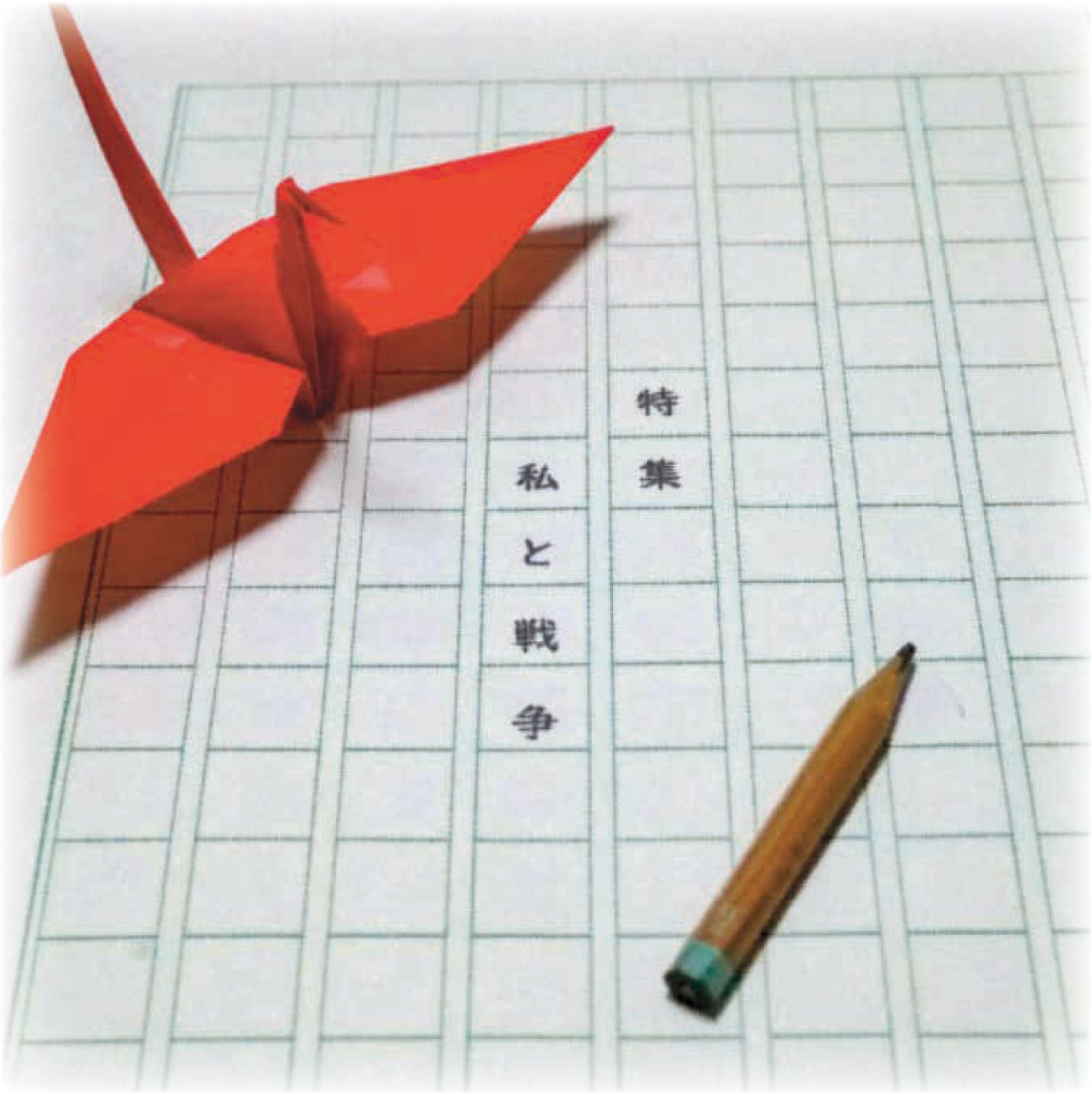

約310万人の犠牲者を出した戦争が終わり、今年で77年を迎えました。

長い時間の中で、あの頃の記憶を持つ人たちは少なくなっています。

世界のいたるところで戦争によって苦しむ人々が生まれ続けている今、平和がもろく崩れやすいものであることを強く感じるようになりました。

平和な時間をこれからも続け、広げて行くためには、あの頃のできごとを知り学ぶことが、今、求められています。

あの頃の対馬の姿を知るために

先の大戦の頃の対馬は、幸いにも大きな戦火に見舞われることはありませんでした。しかし、戦争の足音はこの島にも響いていて、その時代に生きた人たちは、様々な立場で「戦争」を感じて生きていました。つしま図書館をはじめ、各公民館の図書室などには、その当時を記録した本があります。

つしま図書館の郷土資料の棚には当時の記録などが多く残されている

歴史に記録されなかった あのころの対馬

藤崎 利明/著

画家の故 藤崎利明さんが、少年時代に見た戦争が暮らしの一部だった頃の対馬を思い出して描いた作品集。80年前の様子が色鮮やかに描かれています。

珠丸遭難の日に寄せて

堀 勝賽/著

豊玉町廻の故 堀勝賽さんが、自伝の中で、終戦直後の10月に発生した珠丸遭難事故に遭遇したことを書いています。ご自身の病気を機に、辛いできごとを後世に残そうと自費出版しました。

写真提供：九州郵船（株）対馬支店

珠丸遭難事故とは、対馬博多間を運航していた珠丸が、対馬の人たちや、朝鮮半島から引き揚げた人たちを乗せて航行中、戦争中に設置された機雷に接触して爆発、沈没した事故。定員を大幅に超える1000人が乗船していたといわれ、死者・行方不明者は800人を超える大惨事となった。

硝煙の北対馬

渡邊 博至/著

記憶を元に地域の人に取材をして本にまとめました

朝鮮や満州で作った作物などを運ぶため、対馬近海は大変重要な場所でした。特に北部対馬はそれらを運ぶ輸送船が入ってくる場所であり、それらを破壊するために、アメリカ軍の飛行機が頻繁に、爆撃や機銃掃射にやってきました。地域の家が爆撃されたり、住民が機銃掃射を受けたりして犠牲者も出ました。子ども心に衝撃的なできごとでしたが、年月が経つうちに、その事実が薄れていることを強く感じ、記録に残そうと本を作りました。当時の記憶や記録を頼りに、地域の方にお話を聞きながら書き上げ、多くの方に手に取っていただきました。

著書「硝煙の北対馬」を手に

私と

戦争は、子どもたちにも暗い影を落とします。

厳原町久和に住む堀江政武さんは、生後10か月の頃に父親が出征、そのまま二度と会うことはありませんでした。残された家族は、戦後を必死に生きてきました。

証言1　堀江政武さん

父が2回目の招集で再び戦場へと向かったのは38歳の頃、昭和19年8月に満州（現在の中国東北部）へと向かいました。そのまま昭和20年8月の終戦を迎えましたが、その後当時のソ連に捕虜として捕まり、強制的に連れていかれました。向かった先は、ソ連の構成国の一つだったカザフスタンのアルマアタ。首都だったこの場所で、道路や建物の建設に従事させられていました。父は寒さや飢えと戦いながら、対馬へ帰るため必死で働いていたようですが、昭和22年4月21日に亡くなりました。

私が5歳くらいの頃、父が亡くなったことが対馬に届きました。夫の帰りを待ち続けていた母の目に涙はありませんでした。厳原港に母と歩いて父を迎えに行った記憶は残っていて、白木の箱を首から下げた母の様子を憶えています。家に帰って中を開けると遺骨はなく、父の物と思われる爪と飯ごうを止めるバンド、そして、厳原の写真館で撮った幼い私の写真が入っていました。父はその写真を持って戦場へ赴き、亡くなるその時まで持っていたのでしょう、その裏には、亡くなった場所と時間が書かれていました。

母は「泣きよっても子どもは養いきれん」と、嫁いできた堀江家を絶やさないよう必死で働きました。畑を耕し作物を育てる傍ら、現金収入を得るため、山奥まで茅（かや）を刈りに行き炭俵（たつ）を編み、炭を運ぶ仕事を行っていました。私と3人の姉たちも、一俵ずつ背中に背負って山を下りました。家族5人生きていくために必死でした。

中学を卒業すると、進学はせず働きました。山に木を植え世話をしていると、制帽をかぶった高校生を見かけました。父が生きていれば、私も高校に行けたかもしれないと悔しい思いをした記憶があります。しかし、一家の主として、この家を支えていくということだけを考え、必死になって働きました。

戦争が始まると、人は暴力や飢え、病などで命を落とします。しかし、それだけでなく、終わった後も大きな苦しみが待っています。戦争によって父を失った私がそうだったように、生きていくためには、夢や、やりたかったことを諦める場面がたくさんあります。それは、戦争で命を落とすことと同じように辛いことです。

堀江さんの幼少期の写真の裏には、お父様が亡くなった時の記録が書かれていた

次世代へつなぐ試みも～戦没者慰霊祭～

堀江さんが会長を務める、対馬市連合遺族会では、毎年、対馬から戦場へと向かい命を落とした約1400人の慰霊祭を行っています。参加者の高齢化によって、亡くなった人やできごとが忘れらていく今、小学生も式典に参加し、戦争の愚かさや、生まれる悲しさを次世代へつなぐ取り組みも行われています。

戦　争

幼かったあの頃の証言をしていただきました。

福岡県古賀市に住む松﨑直子さんは、終戦後、生まれ育った朝鮮半島から、両親の故郷福岡へと引き揚げる時、対馬を経由しました。当時、小学校1年生のできごとです。

証言2　松﨑直子さん

オリンピックのあった平昌（ピョンチャン）郡の近くに住んでいた私たち一家は、終戦以降、一歩も外に出られなくなっていました。家の外では朝鮮の人たちが「愛国歌」を歌いながら「日本人は帰れ！」と叫び、現地の人たちを支配するような立場だった日本人に対する風当たりはとても強かったです。そんな中でも、親しくしてくれていた現地の人たちが、こっそり食べ物を持ってきてくれて、何とか過ごすことができていました。

9月に入ると、近くの日本人が集まって、日本に向け出発しました。私は、父と母、3歳上の姉と2歳の妹の5人で、それぞれ持てるだけの物を持って、まず釜山を目指しました。

最寄りの駅まで、山道を歩いたり、船で川を下ったりして向かいました。何日かかかって駅に無事につきましたが、船頭さんは日本人に手を貸したとして、同じ朝鮮の人たちに捕まって連れていかれてしまいました。その方がどうなったのかは、今もわかりません。

何日かすると、釜山行きの列車に乗ることができましたが、乗った列車は、馬や牛を運ぶ貨車で、ドアを閉めると真っ暗。すし詰め状態の中列車は走り、どうにか釜山に降り立つことができました。

釜山に着いた私たちは、今度は海を渡らなくてはいけません。小さな漁船を借り、台風の余波が残る対馬海峡へ出た私たちは、木の葉のように揺れる船にしがみつきながら、やっとの思いで対馬に到着しました。

小学校入学前の松﨑さん
幼い頃の写真は
ほとんど行方知れずに

あと一歩で、目的地の福岡へというところで、これまでの無理がたたったのか、妹が体調を崩し、治療のため対馬にとどまることになりました。今では簡単に手に入る整腸剤をやっとの思いで入手し、妹が回復するまでの1か月ほどを厳原で過ごしました。

厳原で過ごしていたある日、包帯を身体中に巻かれた遺体が運ばれ、港が騒然とした雰囲気に包まれました。後になって、それが引揚者を大勢乗せた「珠丸」が、戦争中に設置された機雷に触れて爆発、沈没したためだったと知りました。朝鮮から一緒だった人たちも、皆この船に乗っていて犠牲になりました。妹が元気であれば、きっと珠丸に乗っていたことでしょう。紙一重とはまさにこのことだと、今振り返ると強く感じます。

その後無事福岡へと引き揚げることができ、私は、中学の美術教師になりました。教師時代、在日コリアンの生徒たちが差別され貧しい暮らしをしていることにショックを受けた私は、二つの民族の友好を手助けする活動に取り組みました。また、両民族の友好の証しである朝鮮通信使の行列を陶器で再現したことをきっかけに、再び対馬との縁をいただくことにもなりました。辛い引き揚げの途中、温かく迎えてくれた対馬の元へ、私が作った人形たちが飾られていることをうれしく思っています。

松﨑さんが2年ほどをかけ制作した人形は、朝鮮通信使歴史館に展示されています